大学生のホームシックと対人関係の推移

入学から4年間の縦断研究

伊崎純子

(白鷗大学教育学部)

キーワード: 大学生・ホームシック・対人関係

Homesickness and the human relationships of college students:

A longitudinal study for four years.

Junko IZAKI

(Hakuoh University)

Key Words: College students, Homesickness, Human relationships.

目 的

ホームシックのきっかけは、留学、進学、就職、結婚、戦争など多彩である。要因として個人のパーソナリティに加え、環境的な要因も考慮されねばならない。新しいなじみのない環境に直面することと同時に、故郷の慣れ親しんだ環境やそこでの重要な関係性を失うことがあげられる (Van Tilburg, Vingerhoets & Van Heck, 1996; 文献研究)。

Duck (1991, 仁平監訳, 1995) は、友人関係では親しい関係が出来上がるまでの過程ではなく、出来上がった後の「メンテナン」が大事だと強調し、Roberts & Dunbar (2011) は、友人と異なり、近親者の場合は接触が減っても感情的な結びつきが維持されるとしている。

ここでは、大学生の4年間のホームシックの変化と対人関係の推移に関して縦断的に調査した結果を提示する。

方 法

調査参加者 2012年4月～2014年4月に大学へ入学し一人暮らしをはじめた学生54名(1年次)。学生は任意で研究に協力し、4年間追跡調査に協力した場合には謝礼があることを事前に報知されている。調査途中での辞退は自由であった。

質問紙

①ホームシック質問紙 (33項目・5件法): 「故郷への愛着」と「新しい環境への嫌悪」という2因子で構成されている (Archer, 1998 を原著者の許可を得て、伊崎, 2012 翻訳)。

②親密な関係尺度 (20項目・4件法): 「親密さ」「競争」「分離欲求 (束縛感)」「相手への共感」の4因子で構成され「父親」「母親」「今の同性の親友」「故郷の同性の親友」の4人の相手に対する関係性の強さを測定した (仁平・大平, 2008 を一人暮らしの学生にあわせオリジナル項目の一部入れ替え)。

分析対象期間 2012年7月～2014年4月に、定期的 (4・7・10・1月) に質問紙を郵送法にて実施・回収。「親密な関係尺度」は主として4月に、「ホームシック質問紙」は、各回実施した。統計解析には IBM SPSS Statistics ver. 21 を使用した。

結 果

因子分析 (最尤法・プロマックス回転) の結果、「ホームシック質問紙」は先行研究と同じく「故郷への愛着」 (16項目, $\alpha=.895$) と「新しい環境への嫌悪」 (11項目, $\alpha=.886$) の2因子を抽出した。各因子とも学年の主効果がみられなかった。

「親密な関係尺度」において学年×対象の2要因の分散分析では、対象の有意な主効果 ($F_{15,354}=2.667, p=.001$) が見られたが、学年の主効果、学年×対象の交互作用はいずれも有意にはならなかった。Scheffe による多重比較の結果、父親に対する「親密な関係尺度」点は、母親・今の親友・故郷の親友のいずれに対しても有意に低かった ($p=.004$)。

「ホームシック質問紙」の因子別得点と「親密な関係尺度」の対象×下位尺度でピアソンの積率相関係数を算出したとこ

Fig. 1 ホームシックの推移

Fig. 2 「親密な関係尺度」の合計

ろ、「新しい環境への嫌悪」は「母との競争 ($r=.265, p=.010$)」得点と正の相関があった。「故郷への愛着」は「父への共感 ($r=.299, p=.004$)」「母との親密さ ($r=.341, p=.001$)」「母との競争 ($r=.232, p=.025$)」「母への共感 ($r=.497, p=.000$)」「今の親友との親密さ ($r=.234, p=.024$)」「今の親友への共感 ($r=.450, p=.000$)」「故郷の親友への親密さ ($r=.299, p=.004$)」「故郷の親友への共感 ($r=.409, p=.000$)」と正の相関が、「母への分離欲求 (束縛感) ($r=-.219, p=.035$)」と負の相関が見られた。

考 察

大学生のホームシックは、近年、通信の形態が変化したことと大きく影響を受けていることが推測される。まず、進級するにつれてホームシックは減少するという予測は支持されなかった。これは LINE に代表される無料 SNS の普及により心的距離が近くなったためかもしれない。2012 年は親への連絡手段は電話が多く LINE は皆無だったが、2013 年には親との連絡手段に LINE を利用するものが登場した。先行研究と同様に父親との関係性が最も弱いという結果から、「親密さ」「共感」という肯定的感情と「競争」「分離欲求 (束縛感)」という否定的感情の双方ともに低いということは、母親に比べると、父親に対しては有意に「無関心」であることが伺える。

引用文献

Archer, J. et al. (1998). Derivation of a homesickness scale. *British Journal of Psychology*, **89**, 205-221.